

伊那谷スケツキ

～自然と文化を巡るふるさと再発見～ 第三十二回

前島久美

小笠原三幸さん



9月3日上蔵地域の二百十日のお念仏の行事があった。立春から数えて210日のこの頃は、台風の特異日。もっとも現代では二百十日より前に台風がくる事が多くなったように感じるが、田んぼでは稲が開花・結実する大事な時に台風の被害から守られるようにと念じる行事だ。この日は上蔵に暮らす18名ほどが参加した。座敷に輪になって座り大きな数珠を「(照るように) ナンマイダ」と声に出し念じながら回す。

この恒例の仏事は以前は主に集落のお年寄りが取仕切る行事で2時間余り数珠を回し念じていたそう。歳月とともに、昔ながらの仏事を取仕切るお年寄りはいなくなり、恒例の行事も形式化されたようだ。今回、お数珠を回していたのは5分足らずといったところだろうか。それでもこうして集まって集落の人たちと場を共有する時間があったり、祈りの儀式的存在にかつての暮らしぶりの有り様や人々の思いに想像を巡らせたりすることができるのは有り難い。お念仏の後は上蔵育ちの面々を中心に集落の昔語りに花が咲いた。二百十日を過ぎたらクルミの収穫時だといわれたので直会の後、早速自宅の裏で自生しているオニグルミを少し収穫してみた。

南アルプスの長野県側の玄関口に立って

昨年の夏から三伏峠小屋のお手伝いをさせていただいている。とはいっても個人事業の「もったいない野菜」の個配があるので長くても中2日、多くは中1日で手伝って下山するといったスポットのお手伝いだ。小屋にはアルバイトスタッフが十分にはいるが連休などお客さんが多い時には招集がかかる。

私はどうも職場に「車を運転していく」というアプローチが苦手だ。その点三伏峠小屋は登り口まで車で30分、徒歩二時間足らずで着くので体感的に居心地がいい。現在の小屋主は小笠原三幸さん(75)。前小屋主の濱中愛之助さんの弟にあたる。愛之助さんは昨年亡くなったが

生前から奥さんの千鶴さんと共に親しく、野菜も出してもらっているのが今でも毎日のように交流があるし、集落の習わしや地理のことで分からない事があつたら聞きに行くお家だ。三幸さんは口調がところどころ千鶴さんに似ているし、まかないになすとピーマンの油みそをリクエストすると千鶴さんと同じ味をだしてくれる。思わず親しみを感じてしまう人だ。

山小屋経営は退職後の仕事

愛之助さんは、郵便局に勤め上げてから約10年間山小屋の主人をした。三幸さんも南箕輪村の職員を定年退職後、兄の愛之助さんに誘われてひと夏一緒に仕事をし、翌年からその仕事を引き継ぐことになる。山小屋経営は当時、2

ヶ月間(現在は約4ヶ月間)の仕事だったため、担い手といたら退職後の人の方が時間を作りやすい向きもあるのは確かだ。そのため経営者の体力が持続する期間で交替となる。三幸さんは15年目の夏を過ごしているが、御自身は数年前から交替の時期を感じているようだ。しかし山小屋の仕事は体力もいるし、山の環境下での危機管理能力も求められる責任が問われる仕事なので後継者がなかなか見つからないという。三幸さんは「できるだけ地元の人が後継者になってほしい」と話す。

赤岳会の役割

かつて大鹿村にも山岳会が存在していた。登山道の整備や山小屋の建設などに尽力している。村史によれば、ウォルターウウェストン登山後、明治後期に入ると「赤石」の名が広まるにつれて大鹿村にも登山の風潮が青年の間に広まってきたという。加えて山岳を紹介し登山者の利便を図る事は村民のなすべきことであると気概を持つ者も多くなり、1906年大河原地域の青年ら13名が赤岳会を組織し赤石登山を呼びかけ始めた。

当初の赤岳会の目的は「尚武の美風を助長し、体力を錬り」とあるが、時勢とともに変化した。大正期に入ると信仰的登山から大衆化に移行してきて登山者が増加し、学校登山も盛んに行なわれるようになり会の指針も「赤石山系を研究し、山岳登山者の便宜を図る」ことが目的となった。

赤岳会は大正14年度事業として登山道の修繕、三伏小屋修繕、広河原小屋の建設、植物調査、案内所の発行、天気予報の掲示などの計画を立てている。村は会に対して補助をしている他、県に対して登山者の安全のために事業への協力を陳情しており、この年当時の長野県知事の梅谷光貞が視察の為に南アルプスの縦走を行なっている。1936年(S11)の資料によると広河原、荒川、三伏に建設してある登山小屋は大鹿村の所有するものであるが、これらの小屋はそれぞれ選任の人たちと賃貸借契約だったという。それを思うと現在の山小屋事情は少し寂しい感じがする。小渋川の広河原小屋は無人だ

し、荒川小屋はいつの間にか東海パルプの経営になってしまっているし、実質経営しているのは三伏峠小屋だけだ。

太平洋戦争で一時小屋は閉鎖されるものの戦後、1949年(S24)以降は登山者が急激に増加したという。この頃村の観光協会が主な登山コースを紹介しているが、興味深い。筆頭に小渋川経由の赤石岳登山、赤石岳及び荒川三山踏破、赤石山脈横断、赤石以南縦走、赤石岳から三伏へ縦走とある。現在は、玄人しか登らない小渋川を徒渉して赤石岳にいたるコースだが、広河原小屋に2泊する山行を提案している。

前村長の中川豊さんは山岳観光に尽力された人で、今は廃道となってしまった小渋川の徒渉なしの山道を開拓し整備をされてきた。話を聞くと中川さんが村の職員として在籍している約1982年頃まではその道があり登山客も利用していた。しかし、登山道の整備を担当する産業課長が変わって1年後、その道は廃道となったという。中川さんが整備にあたっていた頃、小渋川の西側に設置された道は崩壊が激しく頻繁に崩れ整備を必要としたという。担当が変われば仕事内容も変わるという事だろうか。三幸さんは「広河原小屋も復活させて赤石岳へのコースもちゃんと整備をしたらそれなりに村は稼げる」と呟く。

登山客の変遷

三幸さんが小屋の経営をし始めてから5、6年(約2002年頃から数年)はシーズン中は休日に限らず毎日のように80名ほどの宿泊客がいたという。テント泊も10人以上で1パーティ。アルバイトは早稲田の学生が常連だった。

ここ10年ぐらいは、週末に多くて5、60人が来て、平日はまばら。客層も若い頃良く登っていただろう中高年が多いため、体力不足の人は小屋入りが大幅に遅れる。テント泊は圧倒的に個人が多いので込み合う時はテント場がパンクしてしまう。アルバイトはもっぱらフリーター。大変な仕事は学生はやらない時代になったのだと実感したという。ここ20年足らずで生活スタイルやレジャーの多様化の波を感じずにはいられない。